



及川 洋樹

おいのわ・ひろき

オイカ創造所一級建築士事務所

多摩美術大学大学院コミュニケーションデザイン研究領域修了。1999年アトリエオイカ創設、2002年オイカ創造所設立。地域工務店支援活動「日常アートの家」のススメを行い、農家、画家、建築家の視点、手段で住環境や商業空間、まちのトリートメントを全国で展開する。自ら修繕工事に携わった麻布の集合住宅「平成の長屋」代表理事、町おこし団体 代官山メディア&ワークス理事、一級建築士

東京都港区 TEL:03-6455-7541 http://www.oica.jp

## ネガティブからポジティブへ

特に東日本震災以降は職人不足を肌で感じています。職人を探している話題も設計・積算段階でよく聞くようになりました。また、それが工期に影響を与えるなどの支障もあり、慎重に考える項目の一つであると捉えています。若者の現場離れは業界に限らずささやかれていますが、これから建築業界を支える人材配置をどのような形で安定させていくべきなのか、長期的な意味でより良い解決策はあるのでしょうか。

そして、もう一つの考える項目が空き家の増加です。いろいろな対策が講じられているのは事実ですが、地方都市の郊外は特に深刻です。これからの日本の人口、世帯数が徐々に減っていくと同時に毎年約40万戸(戸

建て)の新築住宅が建築されていく。このままの延長でと20年程で3~4戸に1戸が空き家になるということにもなりません。

他にも諸問題はたくさんあるかと思いますが、この2つのネガティブな状況をどのようにポジティブに切り替えることができるのかを考えてみたいと思います。

エンジニアリングと  
ブリコラージュ

人生設計も人生のデザインであると捉えるならば、誰もが人生のデザイナーにあたります

が、物事の「デザイン」には「エンジニアリング」と「ブリコラージュ」があることをご存知でしょうか。簡単にご説明しますと、技術を駆使して「無」から「有」を生む前者に対して、後

者は今あるものの組み合わせや仕組みを組み替える事によって違う機能やより効率のよい方向に切り替えていくことと私は認識しています。

そこでこれらの時代はエンジニアリングとブリコラージュをバランスよく融合させることができると、会社が特に持続可能であり、地域の諸問題を解決しながら発展していくと考えております。コト、モノで溢れ返っているこの時代、このコト、モノをどのように組み替えていくのかを意識しながら、日々の業務に取り組んでいただきたいと思います。

## 自然の流れの中での決断

今月は、そのような取り組みを巧みに実行されている会社を紹介します。そして前述の諸問題をスマートに整理されている事実を皆さんに知っていただけたいと思います。今回は私の地元、岩手県盛岡市に足を運びました。

塙創舎の澤口泰俊社長は、同岩泉町出身。林業の盛んな町で育ちました。物心がついた時から木が大好きで、大工だった父の影響なのか、できる限り自分でモノづくりをするそうです。木の年輪を「河の流れ」、節を「星」と表現する澤口社長の話は、まるで「宮澤賢治」の話を聞いているようでした。木が小宇宙のように感じるほどです。

以前は盛岡市街地に事務所と

作業場がありましたが、乾燥から刻みまで伝統工法で木材を本気で扱うには手狭な環境でした。東日本大震災から2年、同市内好摩(旧玉山区)の広大な工場跡地に移転したところです。震災直後に、付き合いの深い沿岸の製材会社のSOSに応じて、同社と周辺の人たちのために米6俵を届けに駆けつけたことがあったのですが、その製材会社から「あの時のお札ではないけれど、ぜひ使ってほしい」と製材機を譲り受けたのです。期せずして、やりたかった製材・加工から刻みまでの一貫作業ができる環境が整いました。

澤口社長のお話を聞いていて、自然の流れや運命のようなものを感じました。

## 多能工めざせる環境づくり

移転により、大工たちが本当に働きやすい環境もできました。広大な敷地内には十数ヶ所の作業場が並び立ち、そこでは皆さんが真剣かつ充実した表情で作業をしています。

敷地が広いこともあり、いろいろな試みをされています。今では建具、塗装、左官、板金、鉄筋工などのそれぞれの作業場も自然に配置され、あらゆる分野を皆で研究したりでき、多能工を目指せる環境になっています。その結果、電気工事と水道工事以外は自社で全てできる施工体制になりました。

加えて、馬鹿によって搬出さ

## 地の縁・人の縁を大切にする経営

## 「まず、正しいと信じることをやる」

れる木材の調達も継続しています。重機が入れない場所にある良材入手できるという実利的な側面もありますが、貴重な馬搬の文化を残していくたいという思いも、そこにはあります。

## 実行して計算

塙創舎は、年間、新築約5棟、古民家再生など大規模改修約5棟に制限して経営しています。

「そのような経営の効率はいいのでしょうか?」と問いました。澤口社長は「効率を考えたら、別の選択になるでしょう。でも正しいと思うことや願うことをまずは実行して、そこから効率を考えます。仕事があるから人を集めのではなく、人がいるから仕事を創ります」と言います。要するに「計算から実行」ではなく、「実行して計算」するとなります。これはまさに発想の転換、組み替えだと感じました。

最終的な目的は、木の良さを伝えながら、材料にこだわった、住まい手のためになる健康的な住宅を提供すること。そこに落とし込むまでにいろいろなプロセスや仕組みを考えているのです。基本は先ほどのブリコラージュ精神。あるものをとことん使います。製材過程の端材はチップ化して庭先のグランドカバーとして、余った断熱材は床下へ敷き詰めます。とにかく、ゴミは極力出さない工事現場を目指しています。

## 地元の木を中心人が集まる

木の周りには自然界の生態系が存在します。木の実を動物が食べ糞をすると地中の生物がそれを分解し、木の栄養素となりまた花を咲かせ木の実になります。人も実を吃るのはもちろん、木陰で休んだり、雨をしのいだりと大昔から木と人も深い関係です。

澤口社長は言いました。木の仕事に人が集まるのです。木の仕事はいろいろな作業工程があるので、さまざまな仕事が存在します。71歳の大ベテランである棟梁から「本当の大工仕事」を学べる環境とあって10人程の20代社員が集まりました。中には事故により障害を負った車椅子の若者もいます。社内には世代間交流が生まれる仕組みが自然にあり、また地元の社外の職人とも助け合いながら、互いの現場を支える協力体制もできています。「地元の木」の仕事に、世代を超えた地域の人々が集まり、それがまた地域の人々のためになる。何の矛盾もありません。

山・木・人が関わる  
地域コミュニティー

互いを必要とする世代間交流が求心力になり、人が集まるコミュニティーへ。そこでは伝統技術を本気で学びたい若者が師匠である棟梁らの周りに集まり、若者は受け継いだ技術で地



築150年の古民家の改修工事の竣工を祝い早池峰岳流石鳩岡神楽による五穀の舞。  
伝統民俗芸能の伝承を兼ね引き渡し式

元の木を使い、地元の方々の生

活環境を創り、そしてまた後輩へ引き継いでいく。山、木、人

とが関わる地域コミュニティーはその価値を理解する地元の人々に支えられ、またその価値を伝えながらの活動として巡り巡つていくでしょう。

また古民家を通じて、地元の人々に地域の風土や歴史、家の愛着や当時の材料の良さなどを伝えながら、確かな技術によって耐震・断熱工事を加えて再生するという事業は、建築コストの軽減、空き家を減らすという効果は当然ですが、岩手の雪深い場所で季節に左右されない作業の標準化(屋根のある現場で仕事ができる)、職人技術の維持・向上という四方良しの仕組みと言えるのではないでし

た。澤口社長は今後も、地元の木を使った木製サッシの製作や地域イベントなど新しいことに取り組んでいきたいそうです。地元を支える持続可能な工務店と、そこで働く人たちの活躍に今後も注目するとともに、地元・岩手の会社であることに誇りを感じます。

## コト・モノのデザイン

